

キリスト教教学演習*****<オリエンテーション>****A. テーマ：キリスト教思想の基本文献を読む**

キリスト教思想を理解し、研究するには、その基本的な文献を広くまた深く読むことが必要である。この演習では、近代以降のドイツ語による文献を精読することによって、キリスト教思想研究に必要な文献読解力の向上をめざす。

今年度は、昨年度に引き続き、ティリッヒのアメリカ亡命初期の講義録から、次のものを取り上げ、演習を行う。

B. テキスト

Paul Tillich, *Frühe Vorlesung im Exil (1934-1935)*

(Ergänzungs- und Nachlaßblände zu den Gesammelten Werken XVII, De Gruyter, 2012)

C. 成績などについて

- ・平常点による。(受講者には、数回の発表担当を課するが、その発表内容と、毎回の演習への参加度とから総合的に判断する。)
- ・使用するテキストについては、コピーを配布する。
- ・参考文献：授業中に紹介する。
- ・受講生には、キリスト教思想に対する関心と積極的な授業参加(参考文献による復習を含め)を期待したい。質問は、オフィスアワー(火3・木3)を利用するか、メール(アドレスは、授業にて指示)で行うことができる。

D. 授業(予習+出席・発表+復習)の進め方**1. 演習参加者の役割**

- (1)授業前：読み・訳す・分析する → 問題点・補足事項。
- (2)授業での発表：順番に読み・訳す。質疑。討論。
- (3)授業後：残った問題を検討する。

- ・前期半期：4/12, 19, 26, 5/10, 17, 24, 31, 6/7, 14, 21, 28, 7/5, 7/12, 19
- ・次回：4月19日は、「導入講義2」を行い、メンバーと担当の確定を行う。
演習は4月26日から開始。

<導入講義1> (2016年度の特設講義1bより)**8. ティリッヒとハイデッガー**

- A. キリスト教思想にとってのハイデッガー
- B. 前期末から亡命初期のかけてのティリッヒとハイデッガー
1920年代後半／1930年代前半、
従来は、フランクフルト講義と『社会主義的決断』
それを、亡命初期に延長すること

(1) 問題状況・思想状況

1. 第一次世界大戦以降の思想状況：19世紀的な近代的知を超えて

19世紀（近代）：歴史主義（自由主義神学・人文社会科学）

と超越論思惟（カント哲学、新カント学派。諸学の哲学的基礎づけ）

↓

現象学運動と弁証法神学：19世紀的歴史主義への批判

2. ハイデッガー『存在と時間』：基礎的存在論（人間存在から存在へ。形而上学の再構築）

人間学としての評価 → ブルトマンの場合

「神を語ることは何を意味するのか」における実存概念（体験や内的生活の客体化に対し）の使用、「ヨハネ福音書の終末論」における終末論的今における啓示（神の言葉）への聴従（決断）とそれによる過去からの自由と将来の可能性など。キリスト教的な「この世」解釈が、ハイデッガーの日常性としての「世界一内一存在」と類似している。

3. ティリッヒ『社会主義的決断』（1933年）の冒頭。

政治思想は人間理解にその根拠を求めねばならないと述べ、ハイデッガーの『存在と時間』を参照しつつ、「世界一内一存在」における被投性と企投に対応する二つの問いを取り上げている。一つは、自らの存在の「どこから」を問う問いであり、存在の「起源」の問いである。もう一つは、存在の「どこへ」の、存在の「要請」の問いであり、それは起源の閉域を突破するように促す。この二つの問いが政治思想として展開するところに、政治的ロマン主義と自由主義・社会主義の二つの系譜が成立し、ティリッヒは自らの宗教社会主義を、社会主義と起源の力の再統合として提示する。

4. ハイデッガーの思想展開、『存在と時間』の中断。

ハイデッガーの「存在」

存在と存在するものの存在論的差異 → 存在忘却

存在の歴運・歴史性（存在史）、真理論

形而上学批判から形而上学とは別の思惟へ

西洋の思惟の総体としての「存在一神論」（Onto-Theo-Logie）

ティリッヒ「カイロスとロゴス」（1926年）

真理の歴史性、超時間的な真理ではなくカイロスにおける真理（ロゴス）

ロゴスの現実化の時間性、存在の歴史性（存在史）

5. ハイデッガーの存在と神との関係？

哲学として神について語るには禁欲的、聖書的背景にも沈黙。

(2) 聖書の神と形而上学的神との緊張関係

6. 聖書的な神と形而上学的思惟との緊張

ティリッヒ『聖書の宗教と究極的實在の探究』：

聖書的な思惟とギリシア的哲学的な思惟（形而上学）との差異性あるいは緊張関係を明確にした上で、「両者が究極的な一致と深い相互依存性を有している」（Tillich、1955、357）ことを明らかにする。

7. 「聖書の宗教」： cf. カール・バルト：啓示（神の働き） ↔ 宗教（人間の営み）

8. 古代ギリシアという源泉において見られた哲学＝存在論

「存在するものの諸領域における存在の現前とその諸構造」についての「存在論的な分析」(ibid., 360)。人間は、「自らを問う存在者」、「有限性の中で存在を問う存在者」(ibid., 361)として、「なぜこれはこのようであって、あのようではないのか」「なぜ私は存在するのか」といった問いに直面する。

↓

この問いを組織的に考え抜く努力としての哲学（存在論）は不可避的。聖書の宗教も存在論と無関係にとどまることはできない。

9. 聖書の「人格主義」(personalism)：

「人格」とは、「自己自身と、また世界とに関係づけられ、またそれゆえに、理性、自由、そして責任を伴う」、「人間的領域での個別性」(ibid., 366)——いわゆる「我—汝」関係の主体——を意味する。

あらゆる宗教において、「聖なるもの」(信仰において志向されたもの＝信仰対象)は人格的な存在として経験される。

10. 人格主義：神を個別性において、つまり、「一存在者」として経験する。

存在論的思惟：神概念。「存在自体」(Being-itself)は「存在する一切のものに現前し、一切のものは存在に参与」(ibid., 368)している。存在論的な問いにおいて、人格的な神の個別性は超越される。

「存在論は一般化し、聖書の宗教は個別化する」(ibid., 371)。

11. 「神—人間」における相互性。

- ・神と人間の人格的關係：自由な相互性に基づく。「聖書の宗教の動的な性格の根源」(ibid., 368)。神の人間創造は自由な人格としての人間存在の創造であり、こうして人間は創造の善性にも関わらず、墮罪の可能性をも有する自由な主体となった。祈りという宗教的行為。
- ・聖書的な人格の相互性は、存在論的神観念(形而上学的な神)に矛盾するよう見える。なぜなら、自由な相互関係が時間、空間、因果律、実体といったカテゴリー内部で成立するのに対して、存在自体はこれらのカテゴリーを超越している。

12. 言葉。

- ・「人格と人格との関係性は言葉を通して現実となる」(ibid.)。啓示は言葉による神の語りかけであり、人間は聴くように求められる。これに対して、「存在論は別のカテゴリーで思考する」(ibid., 369)。
- ・存在論的思惟：すべての存在者は存在自体に参与しそれを分有することによって存在しており、存在自体は、存在するものすべてのなかに現前する。したがって、人間と存在自体との関係は直接的であり、言葉によって媒介されるものではない。
- ・イエスにおける神的言葉の受肉は「聖書の人格主義の完成」(ibid., 371)を意味するが、存在論的思惟にとってはまったく理解不能な事態であると言わねばならない。

13. 祈りにおける神は、通俗的な人格イメージを越えた存在であり、むしろ存在論的思惟と接する地点に立っている。

問われているのは、個々の諸存在論が共有する存在の問いなのである。

14. キリスト教を規定する二つの伝統である聖書の人格主義と存在論的思惟との関係。

「存在論的な問いを問うことは避けられない課題である。パスカルに抗して私はいう、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と哲学者たちの神とは同じ神である。神は人格であり、また同時に、人格としてのそれ自身の否定である。」(ibid., 388)

15. ティリッヒ「神の存在は存在自体である」。

「神が存在自体である」と言えるか？ 聖書の宗教と哲学（存在論）との差異。人間の自らの存在についての問いへの答えとしての「神」象徴。「神」は存在への問いに
に対する答えである、その点で、「神」の存在は存在自体（存在の根底・存在の力）。

(3) ハイデッガーと聖書的思惟との関係

16. ハイデッガーはその思索の最初期の時代をカトリック神学との関わりにおいて開始した（神学生であったハイデッガー）。

カトリック神学から離れた後も、『存在と時間』の刊行に至る 1920 年代において、キリスト教神学との密接な関わりは継続され、同世代のキリスト教神学者との交流は双方に少なからぬ影響を及ぼした。

17. キリスト教思想の側からのハイデッガー理解の正当性については、ハイデッガー研究自体において論じるべき研究テーマ。

ハイデッガーと現代キリスト教思想とが同一の伝統（この伝統に、神秘主義、否定神学、言語論、人間理解などが属している）と同じ歴史的時代を共有しているという観点は、神学と哲学との関係を再考する際に忘れてはならない。

ザラデルのハイデッガー論：ハイデッガー自身は語らぬが、聖書的思惟をその源泉としている。

18. ティリッヒ「ハイデッガーとヤスパース」（1954 年）。

後期ハイデッガーと「中世カトリックの神秘主義的伝統」との関係を描き出しているが、このような視点はハイデッガー理解に何をもちこたえようか。

<参考文献>

(1) キリスト教とハイデッガー

- ・ボンヘッフナー『行為と存在——組織神学に於ける超越論哲学と存在論』新教出版社、2007 年。
- ・ブルトマン『ブルトマン著作集 11、神学論文集 I』新教出版社、1986 年。
- ・辻村公一「ブルトマンとハイデッガー——信仰と思惟——」（『ハイデッガー論攷』創文社、1971 年）。
- ・小田垣雅也『解釈学的神学』創文社、1975 年。
- ・マルレーヌ・ザラデル『ハイデッガーとヘブライの遺産——思考されざる債務』法政大学出版局、1995 年。
- ・茂牧人『ハイデッガーと神学』知泉書館、2011 年。
- ・マクウォーリー（マッコリー）『ハイデッガーとキリスト教』勁草書房、2013 年。
- ・K・リーゼンフーバー『近代哲学の根本問題』知泉書館、2014 年。
「第十二章 ハイデッガーにおける神学と神への問い」

(2) ハイデッガー

- ・『ハイデッガー全集』創文社。『ハイデッガー選集』理想社。
『現象学と神学』、『有と時』（『存在と時間』）、『形而上学とは何か』、
『カントと形而上学の問題』、『杣径』（「ニーチェの言葉『神は死せり』」）
- ・『ハイデッガー読本』『続ハイデッガー読本』法政大学出版局。

(3) ティリッヒ

- ・『社会主義的決断』（『ティリッヒ著作集 第一巻』白水社）。
- ・「カイロスとロゴス」「実存主義」「実存主義的思惟の本質と意味」「近代的思惟における疎外と和解」（『ティリッヒ著作集 第三巻』）
- ・『聖書の宗教と存在の問題』（『ティリッヒ著作集 第四巻』）。
- ・『組織神学』第一、二、三巻、新教出版社。